

アレン・ネルソンさんの納骨式より

名古屋別院フォーラム人権連続講座

佐野明弘さん述(07.7.7)

だから、如来は大悲をもつて衆生を救う。喜ばせて救うというのではないのです。厳肅なる所に還らしめ、念仏申さしめて、救おうとするのです。撰取ということが如来にある。

本来なら撰取は人間の問題でしよう？撰取というのは、自分が自分であることを受け止めることです。その撰取が如来にあるのです。 以上

二〇〇九年三月二十五日、アレン・ネルソン氏が多発性骨髄腫にて亡くなれました。その知らせを聞き、すぐにニューヨークにかけつけ、葬儀を執り行った佐野明弘氏が、四月三日、名古屋別院での人生講座にて、ネルソン氏への憶いを語られました。その一部をご紹介します。

ネルソンさんなのですが、今年の一月に非常に体調をくずれされて、詳しい検査をしてみましたところ『多発性骨髄腫』という病であることが分かりました。そのときに、余命が二ヶ月〜六ヶ月という診断でした。

ご存知の方も多いと思いますが、アメリカの医療事情は非常に厳しいです。例えば風邪で一週間入院したというと百万円ぐらいかかってしまうのです。彼の場合、保険にも入れてもらえていませんでしたし、アメリカは国民健康保険のようなものはないのです。それぞれ保険会社と保険の契約をするのです。今オバマ氏が「全ての国民に保険をかける」ということを言っていますが、その裏側には、そういう厳しい

医療事情があつて、お金の無い人は死ぬしかない。そういうことがまずあるわけです。退役軍人の保障も、もつていない。

もう一つ申し上げますと、彼自身、あまりお金がありませんでした。何回も日本に来て、講演をしてくださっていますけれど、基本的に通訳と二人で五万円というところでやっていたのです。飛行機の費用もその中から捻出していたわけですね。自分がたくさんの人を殺してしまったということがあったのでしよう。「贅沢をしてはならない」という気持ちも少しあつたと思います。

このように、我々はお金が無いこと知っていましたので、関係のある人たちにカンパのお願いを急いでしたわけです。お見舞いに行こうかということになったのですが、彼の方がなかなか具合が悪い。「抗がん剤やら色々な薬で顔がパンパンに腫れていて別人のようだ」と言つて、奥さんが泣いているという状況だったので、彼自身も「今のところ誰にも会いたくない。こんな自分の姿を人に見せたくない。もうちよつとしたら落ち着くから、そうしたら来て欲しいのだ」と言っていたのです。

ところが、良くなるどころかだんだん具合が悪くなって、周期的に酷い痛みが襲うようになりました。モルヒネでその痛みを抑えるのですが、この様子だとあまりもたないだろうということで、奥さんの方から「来てくれ」という連絡があり、すぐに先々週にアメリカへ行つたのです。

そして、お見舞いをして、集まつたお金を渡しました。約七百万円集まつたのです。しかし、二週間ぐらいの入院費が、日本円で百七十万円ぐらいかかりました。

そのときのネルソンさんの状況は、足もパンパンにむくんでいました。短い時間で二人ずつしか面接でき

ないのですけれども、行つたときに足をさすつていたら、「足を自分にも見せてくれ」と言われて見せたら、彼は「Oh god oh god Jesus Christ. This is the man. (神よ！これが人間だ)」と言つたのが印象的でした。

そして、初めて出会つたときのことなどを思い出しながら話をするのですが、スーツと気が遠くなつてしまうのです。もう痛くて、痛くて歩けない。薬が強いものですからすぐに昏睡状態になつてしまう。そんな状態だったので、意識があるときは、はつきりと色んなことを話したり、周りの人のことも気遣つたりしていました。

四人でお見舞いに行つたのですが、他の人には「必ず元氣になつて、必ず日本にまた行くんだ」と言つていたのです。そして、奥さんも「必ず元氣になるはずだ。皆で願つていけば、きつと奇跡が起るのだ」と言つていたので、私は「困つたなあ」と思つていたので。しかし、よく考えてみると、それか家族にとつては心のおき場所がなかつたのです。

ところが、私と二人きりになつたときに、突然「娘にも承諾しているし、ぜひお願いしたいのだけれども、自分が死んだらあなたにお葬式をあげて欲しい、頼まれてくれないか」と言われたのです。「私の方が長生きしたら。約束しましょう」と言つたら、「本当だね、どっちが先に行くか分からない。でも、私の方が先立つたら約束してくれますか？」と言うので約束したのです。それから私の方から「自分が死んでいくことについては、どう感じていますか？」と聞いたら、「実はこの状況だから自分がもう間もなく死んでいくことは分かっている。そして、そのことは受け止めています」「死んでいくことも命の一つの在り様といえますか」「死は命の一部だ(Death is a part of life)」と、こう言っていました。